

定年を迎える教授の特別寄稿

定年退職に際して



宮崎 隆

歯学部 歯科保存学講座
歯科理工学講座

昭和59年4月に奉職して以来、35年間の長きにわたる昭和大学で大きな役割を担うことができた。これも、直属の恩師である故宮治俊幸先生ほか、多くの先輩、同僚、後輩に恵

まれたためであり、ご指導とご厚情に対し心より感謝申し上げます。

この35年間を振り返ると、昭和の最後から平成にかけてパブルがあり、パブル崩壊後は我が国の人口構成が急速に少子高齢化に進む中で、国の医療制度や医師・歯科医師養成を取り巻く環境が激変しました。

昭和59年4月に奉職して以来、35年間の長きにわたる昭和大学で大きな役割を担うことができた。これも、直属の恩師である故宮治俊幸先生ほか、多くの先輩、同僚、後輩に恵

生を筆頭に多くの卒業生と一緒に研究に汗を流し、他の大学にない新しい研究を進めてきました。昭和の歯科理工学は、新素材と先端加工技術の歯科応用に関して日本をリードしてきたと自負しています。

歯科理工学の進歩が歯科医療を支え、かつ変えてきた歴史があります。歯科理工学の教育は、学生が将来医療現場で、材料・機器を正しく使用し、新しい材料・技術の適正な導入を判断するために重要です。私はも負けない濃い内容の授業をしてきました。35年間で何が楽しかったかと問われると、最後まで学生に楽しんで講義ができたことと言えます。

心臓病の子どもたちのサポーターとして



富田 英

医学部 小児科学講座
小児循環器内科学部門
国立循環器病研究センター
成人先天性心疾患センター

1979年に札幌医科大学を卒業し3年間の小児科研修の後、医師としてのすべての期間を心臓病の子供たちと過ごして来ました。国立循環器病研究センター、札幌医科大学、北海道立小児総合保健センターなどで、先天性心疾患に関する臨床

長崎の梅田陽先生、曾我恭司准教授を始めとするご同僚と、心臓血管外科、循環器センター長の上村茂先生を始めとする循環器センターのスタッフ、こどもセンターのスタッフ、こどもセンターにおける一つの中核として認知されてきているものと思

研究、とりわけ新しいカテーテル治療の開発・教育・研究にあたっては、緑あつて2007年5月、昭和大学横浜市北部病院循環器センターに赴任することになりました。同院の小児循環器診療体制を充実するにあたっては、お声かけいただいたカリフォルニア大学サンフランシスコ校の佐野俊二教授(当時は岡山大学心臓血管外科)、循環器センター長の上村茂先生を始めとする循環器センターのスタッフ、こどもセンターのスタッフ、こどもセンターにおける一つの中核として認知されてきているものと思

2018年1月、小児循環器グループ全体が昭和大学病院に異動し、小児循環器・成人先天性心疾患センターを立ち上げさせていただきました。発足後まだ1年ではありますが、都内における一つの中核として認知されてきているものと思

願いします。各位のご指導とご支援をお願いいたします。

定年退職に際して



柴田 孝則

医学部
内科学講座 腎臓内科学部門
(昭和大学病院 腎臓内科)

昭和大学医学部を1979年に卒業し、第一内科医教室(当時)に入局。内科学としての第一歩を踏み出し

ました。内科学の臨床を学ぶなかで、腎炎の免疫病理学に惹かれて研究を始め、学位取得後にスイスのジュネーブ大学医学部病理学教室に3年半にわたる留学する機会を頂きました。その間、自己免疫病の発症と進展機序の研究に従事したことが、その後の私の研究活動の基盤となりました。留学中の1988年に腎臓内科が診療科として分離、設立されたことから、1989年に帰国後は腎臓内科に属し、腎臓内科学全般の臨床・教育・研究の道を進むことになりました。

口唇口蓋裂治療の追求



大久保 文雄

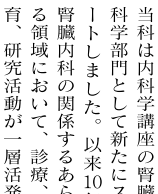
医学部 形成外科科学講座
(藤が丘病院 形成外科)

1980年(昭和55年)に昭和大学を卒業し、形成外科学教室に入局しました。日本鋼管病院での整形外科研修を皮切りに、虎の門病院での麻酔科、国立長野病院での整形外科、埼玉医科大学での形成外科、国立循環器センターでの耳鼻咽喉科と目まぐるしい移動を繰り返したのち、昭和大学で形成外科研修、博士論文執筆、形成外科専門医試験をクリアしました。その後はニュージージーランドのミッドモア病院形成外科での研修を経て、愛知県にある西尾市民病院の形成外科部長となり、鬼塚卓爾教授が日本形成

口唇口蓋裂は日本人に最も多い先天性異常の一つで、初代教授の業績により、数多くの患者さんの治療にあたり、ほとんどの患者さんが術前矯正と初回歯肉骨膜形成は本邦で最も早くから行っており、良好な成績を築きつづけています。形成外科は退任しますが、しばらくは口唇口蓋裂センターの一員として尽力する予定です。今まで育んでくれた昭和大学に深甚なる感謝を申し上げます。

2008年、内科学講座の大講義制への再編に伴い、当科は内科学講座の腎臓内科部門として新たにスタートしました。以来10年、腎臓内科の関係するあらゆる領域において、診療、教育、研究活動が一層活発化しています。このような時に腎臓内科学部門教授の定年退職を迎えることができると、これまで多くの皆様にご指導いただいたお蔭と心より感謝申し上げます。最後に、これからの本学の益々のご発展をお祈り申し上げます。

昭和大学に感謝



平野 勉

医学部 内科学講座
糖尿病代謝・内分泌内科学部門
(昭和大学病院 附属東病院 糖尿病代謝・内分泌内科)

私は関連病院へ出張や海外留学の期間を含めると40年近くの長きにわたって

ています。横浜市北部病院の医師員数も9名から20名へ増加し、麻酔科管理手術件数も2003年3129件から2007年6098件へ増加しました。昔の教育では「先輩を見て盗め」と教えられ、時間外も先輩と一緒に行動しましたが、今はマニュアルが重視され、更に最近では「若い人は早く帰せ」と言われて、都合よく未経験症例に巡り合うかなどと戸惑いを隠せません。医師員から私の口癖を「言指しろ」「俺と替われ」に指摘され、山本五十六連合艦隊司令長官の言葉「やつてみせ、言つて聞かせて、させてみせ、誉めてやらねば人は動かじ」の第一項で終わつてはいる自分、定年になつたまだ未熟だなと思ひました。

最後に紙面をお借りして、2002年から麻酔科運営に献身的に多大な貢献を下さつてくれる秘書の田畑春美様、厚く御礼申し上げます。昭和大学の更なる発展を心よりお祈り申し上げます。

定年退職に際して



小坂 誠

医学部 麻酔科学講座
(昭和大学横浜市北部病院 麻酔科)

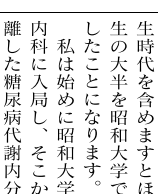
私は、1979年川崎医科大学を卒業して岡山大学麻酔科へ入局し、2003年10月に前教授世田先生からの要請で横浜市北部病院へ出向しました。この頃、関東の先生方の雑談で「君は何線? JR? 地下鉄?」を聞き、地域の話が「都会」とは鉄道ファンが「都会」と思い、地下鉄の運転席からの眺めだけが綺麗で、T V番組に、妙に納得したので覚えておきます。

私の赴任後15年間で当初の医師員は全て入れ替わり、鈴木尚志先生が江東豊洲病院に、大江克憲先生が昭和大学病院附属東病院に異動され、教授として活躍され

私には1979年川崎医科大学を卒業して岡山大学麻酔科へ入局し、2003年10月に前教授世田先生からの要請で横浜市北部病院へ出向しました。この頃、関東の先生方の雑談で「君は何線? JR? 地下鉄?」を聞き、地域の話が「都会」とは鉄道ファンが「都会」と思い、地下鉄の運転席からの眺めだけが綺麗で、T V番組に、妙に納得したので覚えておきます。

最後に紙面をお借りして、2002年から麻酔科運営に献身的に多大な貢献を下さつてくれる秘書の田畑春美様、厚く御礼申し上げます。昭和大学の更なる発展を心よりお祈り申し上げます。

定年退職に際して



内田 英二

昭和大学研究推進室

私は1980年(昭和55年)に医学部(第48回生)を卒業しました。臨床医を目指していましたが、学位取得のために大学院に進学し、上條一也先生の教室(医学部第二薬理学教室)にお世話になりました。

大学院2年生の夏に上條教授からお呼びがかかり、「内田、アメリカに行け」と言われ、その年の11月にペンシルヴァニア大学医学部薬理学講座にポスドクトラルフェローとして2年間留学しました。日本の学位取得のための研究(主論文、副論文)は全て米国での仕事になりました。留学中に上條先生が突然お亡くなりになり、安原一先生が後を継がれたため、少して

私は1980年(昭和55年)に医学部(第48回生)を卒業しました。臨床医を目指していましたが、学位取得のために大学院に進学し、上條一也先生の教室(医学部第二薬理学教室)にお世話になりました。

大学院2年生の夏に上條教授からお呼びがかかり、「内田、アメリカに行け」と言われ、その年の11月にペンシルヴァニア大学医学部薬理学講座にポスドクトラルフェローとして2年間留学しました。日本の学位取得のための研究(主論文、副論文)は全て米国での仕事になりました。留学中に上條先生が突然お亡くなりになり、安原一先生が後を継がれたため、少して

今後昭和大学が中心になって保険適応取得を目指していきます。

その他に、教育ではOCS Eの責任者をさせていただき、病院においては糖尿病、脂質異常の患者さんを数多く診察し、医師として貴重な体験をさせていただきました。これを礎にさらに優れた臨床医になれるよう努力いたします。

最後に私の医師人生を一言で表すならば「昭和大学で働けて幸せ」に尽きます。ありがとうございました。

もお手伝いできればと帰国後に助手として採用していただきました。

安原先生は臨床薬理学がご専門であったため私も動物からヒトの薬理学に転向し、臨床薬理学分野で研鑽を積ませていただきました。1989年から1年半ほど日本臨床薬理学会海外研修員として、オランダ国立ライデン大学病院のCentre for Human Drug Research (CHDR)でヒトを対象とした臨床試験を複数実施しました(プロトコル作成・倫理委員会承認取得・実施・解析・報告書作成)。CHDRとは現在も交流が続いており、学会では理事を9年間務め、2013年には第34回日本臨床薬理学会学術総会を東京の国際フォーラムで開催させていただきました。

内外の多くの人に恵まれて悔いのない大学生活だったと思いますが、それも上條先生の一言から始まったことを考えると、いくら感謝してもきれません。どうもありがとうございました。